

障害者対策総合研究開発事業 事後評価(令和7年度 終了課題)について

「障害者対策総合研究開発事業」における令和7年度 終了課題の事後評価結果を公表します。
詳細につきましては、以下の各項目をご覧ください。

1 課題評価の趣旨

■事後評価

研究開発課題等について、研究開発の実施状況、研究開発成果等を明らかにし、今後の研究開発成果等の展開及び事業等の運営の改善に資することを目的として実施します。

2 課題評価委員会 開催日

- (1) 感覚器障害分野 : 令和8年8月6日
- (2) 身体・知的等障害分野 : 令和8年8月10日
- (3) 精神障害分野 : 令和8年8月13日

3 評価委員一覧 (◎委員長)(敬称略)

(1) 感覚器障害分野

氏 名	所属 役職
小林 一女	学校法人昭和医科大学 大学院保健医療学研究科 特任教授
五味 文	学校法人兵庫医科大学 眼科学 主任教授
佐藤 伊織	国立大学法人東京科学大学 保健衛生学研究科 教授
永井 春彦	北海道勤労者医療協会 勤医協札幌病院 眼科副科長
平澤 恵理	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 教授
福島 邦博	医療法人さくら会 早島クリニック 理事長
◎ 村上 晶	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 特任教授

(2) 身体・知的等障害分野

氏 名	所属 役職
今橋 久美子	国立障害者リハビリテーションセンター研究所 室長
大串 幹	兵庫県立リハビリテーション中央病院 院長
河野 豊	茨城県立医療大学 医科学センター 教授

佐藤 伊織	国立大学法人東京科学大学 保健衛生学研究科 教授
◎ 神宮司 誠也	特定医療法人起生会 大原病院 副院長
平澤 恵理	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 教授

(3) 精神障害分野

氏 名	所属 役職
石井 良平	公立大学法人大阪 大阪公立大学 大学院リハビリテーション学研究科 教授
尾島 俊之	国立大学法人浜松医科大学 医学部 教授
◎ 加藤 忠史	学校法人順天堂 順天堂大学 医学部 主任教授
中里 道子	学校法人国際医療福祉大学 医学部 教授
中林 哲夫	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 新薬審査第三部 部長
西 大輔	国立大学法人東京大学 大学院医学系研究科 教授
西田 淳志	公益財団法人東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター センター長
長谷川 花	一般社団法人静岡赤十字病院 精神神経科 部長

4 評価項目

- ① 研究開発達成状況
- ② 研究開発成果
- ③ 実施体制
- ④ 今後の見通し
- ⑤ 事業で定める項目及び総合的に勘案すべき項目
- ⑥ 総合評価

※ AMED が定める 10 段階評価により、①～⑤を勘案しつつこれらと別に評点を付し、総合評価をする。

5 評価対象課題

(1) 感覚器障害分野:4 課題

研究開発課題名	視覚障害者における就労支援のニーズ実態調査と日本版リエゾンシステム導入の有効性の検証及び開発
代表機関・役職	学校法人慶應義塾・准教授
研究開発代表者	栗原 俊英
評価コメント	本研究は、視覚障害者の住居や就労の実態調査（全国）と相談事例収集（ベースライン測定、1施設）を行い、その結果を受けて日本版リエゾン・オフィサー・プログラムの試作及び効果検証を実施して、全国展開に向けた要件の分析・研修プログラムの改良・モデル研修の実施を行う当初計画であった。視覚障害者（ロービジョンを有する方）が地域社会の一員として安心して生活できることに資する技術開発（研修の開発と普及）として、事業趣旨に沿い、今後の展開も期待できる開発計画であった。時間的な遅れはあったものの、研修プログラムは試作・実装された。外部団体、特に当事者が十分に研究開発に参画されたことが見てとれ、「視覚障害リンクワーカーの手引き」作成にも繋がったことは評価できる。一方、公募時に求められていた「都市規模や地域差の克服」について、地域資源や医療体制の差異を踏まえた運営モデルの構築や介入研究による就労到達期間の比較解析は十分に実施することができなかった点が今後の課題である。

研究開発課題名	聴覚障害者の就労支援チェックリストに基づいた就労マッチング支援手法の開発および遮音材・補聴援助システムによる住居支援の効果の検証
代表機関・役職	国立大学法人岡山大学・講師
研究開発代表者	菅谷 明子
評価コメント	聴覚障害者の就労支援が多職種連携でライフステージを通じて継続的に行われ、障害者雇用の安定化、離職率低下につながる研究である。本研究は、聴覚障害者の住居支援と就労支援を実現するために、3つの研究開発項目を立てて、それぞれ実施する計画であった。結果としていずれの研究開発項目についても当初計画通り進捗しなかった部分があり、実現可能な範囲を着実に進めて貴重な調査結果・成果を得ることはできたものの、できなかった部分については今後の展開への期待が残る。

研究開発課題名	小児の効果的で安全な補聴器装用に関する研究
代表機関・役職	国立大学法人九州大学・助教
研究開発代表者	野田 哲平
評価コメント	本研究は、「難聴児に対する補聴器適応及びその限界についてのガイドラ

	イン開発に資する研究を実施すること」が求められており、まさにガイドライン開発に資する複数の研究を実施・遂行できたと評価できる。特に、軽中等度難聴児に対する補聴の指針が作成され、Web サイトで公開されており、今後のガイドライン作成に資する成果と考えられる。ガイドライン作成には Minds 準拠の基準を満たすエビデンスが不足していたとのことだが、CQ を明らかにして、どのエビデンスが不足していたのかを明らかにできたのであれば、それは今後の展開につながる活動と評価できる。
--	---

研究開発課題名	視覚障害者の社会参加を見据えた住居支援方法についての検討
代表機関・役職	学校法人順天堂・専任准教授
研究開発代表者	平塚 義宗
評価コメント	ロービジョンケア連携システム構築について本研究では、「ニーズ・実態の把握と対策の検討」「住居支援方法の実装と評価」「在宅支援とサービス提供範囲の可視化」という3つの柱に沿って研究を遂行し、住宅内の個別的な環境整備と、生活圏域の可視化や制度的課題の抽出を通じて、視覚障害者の自立とQOL向上に資する包括的な住居支援基盤を構築した。ミクロ的に患者の実生活でのQOL改善を目指す結果がでると同時に、マクロ的な分析も行われている点は評価できる。

(2) 身体・知的等障害分野：1課題

研究開発課題名	慢性期肢体不自由者の状態評価システム構築と運動介入マッチングに関する研究
代表機関・役職	国立大学法人東京大学・教授
研究開発代表者	緒方 徹
評価コメント	本研究は、慢性期障害者の健康管理を体組成、身体活動量および体調質問票を用いて継続的に評価する手法の基盤構築を進めた点に意義がある。これらの指標を活用した健康管理システム開発の基盤が整備され、障害当事者が自身の活動量や体調を把握し、自律的な健康管理を実践できる仕組みの構築につながる成果が得られたことは、社会的意義が高く評価できる。

(3) 精神障害分野:5 課題

研究開発課題名	治療抵抗性うつ病に対するシロシビン療法に関する研究開発
代表機関・役職	学校法人慶應義塾・教授
研究開発代表者	内田 裕之
評価コメント	本研究は、国内で初めてシロシビンを用いた臨床研究を実施し、その実施可能性を確認した点で高く評価でき、日本におけるシロシビン療法の有効性や作用機序を検討する上で意義深い知見である。シロシビン療法の適切かつ安全な実施に向けては、併用する心理療法に関する研修プログラムや実施ガイドラインの整備についても今後の発展が望まれる。

研究開発課題名	難治性うつ病に対する反復性経頭蓋磁気刺激法(rTMS)と認知行動療法(CBT)併用療法の有効性:ランダム化比較試験のプロトコル開発
代表機関・役職	学校法人慶應義塾・専任講師
研究開発代表者	片山 奈理子
評価コメント	本研究は、フィージビリティ研究を通じて安全性および実現可能性が確認されており、当初計画された成果が着実に得られている点は評価できる。rTMS に認知行動療法を併用することで、症状改善のみならず、Well-being の向上などの質的アウトカムへの効果も期待され、今後の成果報告が待たれる。

研究開発課題名	医療情報を統合したうつ病の治療最適化に資するシステムの開発
代表機関・役職	学校法人慶應義塾・准教授
研究開発代表者	菊地 俊暁
評価コメント	AIを活用したうつ病治療支援ツールの開発は、今後の精神科診療のあり方を見据えた意欲的な取組として評価できる。無作為化比較試験では、受診回数が比較的少ない症例も含まれていたことから主要評価項目において有意差は認められなかったものの、意思決定支援に対する満足度の向上や抑うつ症状の改善が示されたことは有意義な成果である。また、研究期間中に脱落者が認められなかった点は、本ツールの受容性や実装可能性を示す重要な結果と考えられる。

研究開発課題名	電気けいれん療法で臨床的に安定した、抗うつ薬治療抵抗性の大うつ病性障害患者に対する外来維持反復経頭蓋磁気刺激療法の再燃予防効果:二重盲検ランダム化シャム比較試験
代表機関・役職	学校法人藤田学園・講師
研究開発代表者	佐久間 健二
評価コメント	抗うつ薬治療抵抗性うつ病患者を対象とした rTMS の二重盲検ランダム化シャム対照試験は、貴重な研究である。維持 rTMS 群において再燃割合が低い傾向が示されたことは一定の意義を有しており、維持治療としての有用

	性が期待される。一方で、期待された有効性が十分に示されなかった要因については、対象症例数や介入方法、評価期間などを含めて詳細な検討が望まれる。
--	---

研究開発課題名	NMDA 受容体スイッチング能評価による統合失調症早期診断法の開発
代表機関・役職	学校法人順天堂・准教授
研究開発代表者	吉川 茜
評 価 コ メ ン ト	本研究の成果は、若年発症統合失調症の病態特徴の解明や病因の発見につながる可能性があり、この独創性と探求方向には期待できる。今後、研究を発展させるためには、さらなるサンプリング手法の改善、サンプル数を増やした研究が期待される。

(以上)